

# 中古語における格助詞「へ」の意味

——和歌の詞書を資料として——

辻 本 桜 介

## 1. はじめに

中古語<sup>(1)</sup>の格助詞「へ」に関しては石垣（1942）以来の研究の蓄積があり、今後、新規性のある事実の報告がなされる気配は無いように思える。すなわち、〈方向〉という中核的意味は現代語の「へ」と変わらないものの、その〈方向〉のあり方が、発話者から遠ざかるものに概ね限られること、〈広い場所〉が目標点となることなど、いくつか現代語と異なる点が指摘されている。こうした「へ」に関わる文法現象を一通り整理したうえで、その変容過程に対し理論的な説明を与えようとする論考（森 1995）も、すでに現れている。しかし、改めて以上の成果を眺めるに、結局のところ古代の「へ」がどういう意味を表すのか判然としないようにも思える。詳細は2節で述べるが、主な疑問点として次の2つがある。

第一に、古代の「へ」は「へ着く」「へ至る」のように前接語の表す場所への〈到達〉を表す形ではほぼ使用されないことが知られているが、これは「へ」のどのような意味特徴によって生じる現象なのだろうか。「へ」が〈到達〉を意味しなかったということは確かであろうが、それは現代語でも同様である。

---

(1) 「へ」の歴史を扱う先行研究はどれも中古語だけでなく上代語も視野に入れているようだが、上代語の「へ」は名詞「辺」との切り分けが難しく、意見が分かれている。上代の用例は少ないので、本稿では必要のない限り触れないこととしたい。

(1) 私たちは入口へ進んだが、途中で引き返した。

第二に、古代の「**X** へ」における **X** は発話者から見て遠い位置にあるということも先学の間では共通認識となっているようだが、この〈遠い〉という意味特徴はどのようにして認められるのだろうか。「**X** へ行く」において **X** が出発地からはいくばくか離れた位置にあるのは当然のことであって、離れていることをもって直ちに〈遠い〉と決めて良いわけではない。

さて、森（1995）以降に出た研究として辻田（1999）があり、和歌の詞書には「へ」が頻繁に現れるとされている。従来、和歌の詞書はこうした文法研究で使用されたことが殆ど無く、新しいデータを提供する可能性のある資料として注目される。そこで本稿では中古の和歌の詞書に見られる「へ」を観察してみることにしたい。結論を先取りすれば、得られた「へ」の用例の観察の結果、中古語の「**X** へ」は単に〈方向〉を表すのではなく、基本的に〈“出発地に近くはない **X**”の周辺を移動途中である〉という意味を表すものと考えられる。

以下、本稿の構成は次の通りである。2節では、先行研究に対する疑問点を改めて提示する。3節では、勅撰集・私家集・私撰集・歌合類から抽出した格助詞「へ」の用例と、その比較対象として抽出した格助詞「に」の用例について、それらが含まれる文節の形態を一覧にして、「へ」の特徴を探る。4節では「へ」が〈移動途中〉という意味特徴を持つという仮説を立て、用例の分布状況について説明を試みる。5節では詞書に頻出する具体的な地名をもとに、「へ+[移動動詞]」の表す移動動作が言語主体から見てどのような位置で起きているのかを考える。6節では、分析結果を整理して結論を出す。なお本稿では「へ」の特徴を探るため、類義の意味を表す「に」についてもしばしば言及する。以下で言う「に」は、断りの無い限り全て着点を示す格助詞「に」を指すものとする。

## 2. 先行研究と疑問点

筆者の見る限り、古代語の「へ」に関する研究は順調に発展してきた。その経過はすでに森（1995: 292-295）によって分かりやすく整理されているので、ここでは本稿で問題点とする部分に絞って取り上げたい。

### 2.1 〈到着〉を表すのか

「へ」に関して諸家が揃って注目したのは係り先の動詞語彙である。現代語では「教室へ着く」「尼崎へ到着する」のように目的地への到達を意味する述語動詞が使われることもあるが、中古語では基本的に「行く」「のぼる」「参る」等の具体的な移動動作を表す動詞語彙が述語となることが早くから指摘されている（石垣 1955: 56: 58・青木 1956: 109）。その上で、この傾向に反する用例が中古に多少存することもまた、既に指摘されている（青木 1956: 112・中川 1959: 98-99・此島 1966: 91・白倉 1975: 16-17）。

さて、以上の研究における事実認定の内容に異論は無いが、結局、古代の「へ」の意味は現代語のそれとどう異なるのだろうか。「着く」「至る」等と共起しないこと（青木：1956: 109）を、“〈到着〉を表さない”という特徴として把握したらよいのだろうか。しかしそれだと現代語と同様の特徴を捉えたことにしかならない。

(2) 私たちは入口へ進んだが、途中で引き返した。((1) 再掲)

この例においては〈到着〉という含意が打ち消されている。これは「へ」が語彙的意味としては〈到着〉の意を表さないことを示していよう。

現代語と中古語とで「へ」の持つ意味の違いを考えるなら、〈到着〉という意味特徴の有無ではなく、“到着前であること”を表す働きの有無を問題にすべきだろう。“到着前であること”を表すなら「着く」「至る」等と共起しないのは当然であり、“到着前であること”を表さないなら、現代語のように「着く」「至る」と共起することがあっても不思議ではない。4節で、この仮説の

妥当性を示す現象を指摘したい。

## 2.2 〈遠い場所〉を表すのか

「へ」に関する従来の把握の中には、もう一つ疑問の持たれるものがある。それは、「へ」が出発地から見て〈遠い場所〉を表すとする説である（杉井 1954: 48・青木 1956: 110・白倉 1975: 15）。この説は森（1995: 293）でも支持されているのだが<sup>(2)</sup>、「へ」に本当に〈遠い場所〉という意味合いが備わっているかは定かでない。もちろん、「行く」「参る」等の表す移動の目標点を表すことは間違いなさだろうから、出発地から見て一定の距離がある場所を示すことにはなるが、その距離が語り手（あるいは移動主体）の捉え方で「近い」ものか「遠い」ものかは、「へ」の前接名詞を見るだけでは分からない。再検討が必要であろう。

また、「へ」が出発地から目的地の間に一定の距離があることを表しつつ、2.1 で考えたように“到着前であること”をも表すとなると、具体的には出発地と目的地の間のどのあたりを移動しているのかという疑問も生じる。以上の点については5節で考えたい。

## 3. 調 査

2.1 で、「へ+[移動動詞]」が〈到着〉を表さないこと背景にどのような原理があるかを問題とした。この〈到着〉という意味合いはアスペクト的意味の一環とも解されるから、この問題に対する正攻法は、「へ」の係り先の述語

(2) 森（1995: 299）は、「へ」がその語源と思われる名詞「辺」の「…のあたり」の意を残しているという前提に立って、言語主体にとって遠方の場所を表すようになる変化について理論的に説明している。すなわち、言語主体が自身に身近な場所を「…のあたり」のように曖昧に言うとは考えにくいというのである。しかし現代語において「私の手のあたりを狙って玉を投げて」「私の顔のあたりに虫が飛んでくる」といった言い方をすることは特に問題無く可能であるから、遠方であることの必然性は無いように思う。

動詞に対するアスペクト形式の付き方を調べることであろう<sup>(3)</sup>。

調査に当たっては、後拾遺和歌集の成立時期を下限として、CHJで検索可能な勅撰集と、新編国歌大観所収の私家集・私撰集・歌合類を用いることにした（上代歌人の名を持つ歌集は除いた）。和歌の詞書は辻田（1999: 3）において「へ」と「に」の混用が「非常に多く見られる」と指摘されており、その混用も、詞書特有の類似した構文・文脈の中でのことであろうから、「へ」と「に」の差異が鮮明に見て取れることが期待される。これを踏

まえて詞書から「へ」の用例を抽出したところ、598例と十分な量を抽出できた。なお和歌自体には「へ」の用例が極めて少ないと言われているが（此島1966: 94）、調査対象とした資料からは126例と少なからず見出ししており、これもデータに加えてある。

表1で、得られた「へ」の用例を観察した結果を示した。係り先の動詞ごとに用例数を示してある。物理的な移動を表す動詞が殆どを占める点は、古代語に関して従来指摘されていることと矛盾しない。この中で「行く（いく・ゆく）」「罷る」「下る（くだる）」は突出して用例数が多いが、これらは着点を示す「に」と共起する用例も一定数現れることが期待される。

そこで、「行く」「罷る」「下る」の3語に関しては着点の「に」に後接する用例を抽出し、「へ」の特徴を探る際の比較材料とすることにした。その結果、

表1 「へ」の係る動詞

行く	187	入る（四段）	5
罷る	166	奉る	3
下る	84	告げ遣る	3
詣づ	32	言ひ遣る	3
遣る	25	急ぐ	2
遣はず	20	さし置く	2
帰る	18	まかり帰る	2
参る	14	詣で来	2
去ぬ	14	発つ	2
罷り下る	13	まかづ	2
渡る	9	言ひ遣はず	2
入る（下二段）	7	誘ふ	2
おはず	6	不詳	3
出づ	6	省略	48
のぼる	6	その他	31
移る	5	合計	724

(3) 園田（2006: 232-263）は近世後期江戸語の「に」と「へ」を含む句に付くアスペクト形式を観察し、「へ」の方で制限が働くことを示している。古代の「へ」の観察にも有効な手法と思われるので、参考にした。

表2 「へ」と「に」の比較

「へ」+[移動動詞] (計 724 例) を含む文節の形態の上位 20 種		「に行く／に罷る／に下る」 (計 555 例) を含む文節の形態の上位 20 種	
連体形 (連体修飾)	126	連用形+て	219
連体形+に	68	連体形 (連体修飾)	33
連用形+ける (連体修飾)	63	連用形+たるに	29
終止形+とて	52	連体形+に	17
終止形 (文末)	40	未然形+む (文末)	15
連用形+けるに	26	連用形+たりしに	15
連用形+て	16	連用形+けるに	14
連用形+しに	13	連用形+ける (連体修飾)	13
連用形+けるに	12	命令形+りけるに	12
連用形+し+名詞	12	終止形+とて	9
未然形+む (文末)	11	連用形+たれば	9
連用形+けるときに	10	連用形+はべりけるに	7
連体形 (文末)	9	終止形 (文末)	7
連体形+を (格助詞)	7	連用形+たりけるに	7
連用形+けるとき	6	連用形+たりければ	7
連用形 (中止)	6	連用形+けるを	6
連用形+ければ	5	連用形+しに	6
終止形+らむ	5	連用形+そめて	6
連用形+はべるに	4	連用形+しに	5
命令形 (文末)	4	已然形+りけるときに	5

「に行く」178例, 「に罷る」297例, 「に下る」80例, 合計555例とこちらも十分な量のデータを得た。

表2では, 「へ」の係り先となる移動動詞が作る文節の形態の上位20種と, 「に行く」「に罷る」「に下る」が作る文節の形態の上位20種を用例数とともに並べた。「へ」については共起する移動動詞との間に係助詞等の別の要素が割り込んだものも含め全例を集計したが, 「に」は直接「行く」「罷る」「下る」が付いた用例のみを抽出してある。次の4節では, 主に表2に示すデータから読み取れる「へ」の特徴について考察したい。

#### 4. 用例の傾向

本節から具体的に用例を観察していくが、五島(1982: 148)では、源氏物語(源氏物語大成の本文)の「へ」の中で「に」の異文を持つものの割合は48%に上るとされる(反対に、「へ」に置き換えられそうな「に」が「へ」の異文を持つ割合は11%とのことである)。これを踏まえるに、「へ」の一例一例を確例として重視することは却って誤った結論に導かれる可能性が懸念される。したがって以下の分析では、用例の現れ方の傾向を重視したい。

##### 4.1 〈移動途中〉という意味特徴

表2で「へ」と「に」を含む文節の形態を見比べると、「へ」の方

で高い使用頻度を示すのは次のように二節を作る形である。「に」の方でも二節は少し現れるが、かなりはっきりした差があるのは確かだろう。

(2) 三月十日、あづまへまかるに、つつみてあひみぬ人をおもふ(増基法師集・74)

(3) 神な月ばかりに京へかへるに、もみぢをみて(輔親集・32)

こうした「…へ…に」は、「…途中で」のように解すと良く意味が通る場合が多いようだが、二節の意味は文脈・解釈に拠るところが大きい。そこで「へ」「に」を含む文節が連体修飾する名詞を一覧にした表3を確認したい。「へ」

表3 「へ」「に」を含む文節が連体修飾する名詞

へ		に	
人	126	人	18
みち	41	みち	13
女	5	水	5
雁	3	日	3
春	3	舟	3
月	3	こと	2
水	3	方	2
文(ふみ)	3	男	2
男	2	女	2
とき	2	その他	15
こちかぜ	2	被連体修飾語無し	490
雲	2	合計	555
ころ	2		
波	2		
よし	2		
その他	36		
被連体修飾語無し	487		
合計	724		

の方で「…へ行く人」「…へ罷る人」など「人」に係る用例が突出して多いことの事情は定かでないが、その次に多い「みち」についても、やはり「へ」の方で比較的割合が高く出ており（「に」では 555 例中 13 例で約 2.3%、「へ」では 724 例中 41 例で約 5.7%）、注目される。「へ」が〈移動途中〉を表す名詞「みち」と共起しやすいことは、「…途中で」の意で解される二節の用例数が多いことと軌を一にする現象であろう。

(4) きさらぎのはつむまにいなりへまうづるみちに、田つくるをみて…  
（輔親集・六）

(5) かもへまうづるみちに、いしなとりのいしひろふ女に、まるなる石  
とらすとて（為信集・114）

このことから、「へ」は〈移動途中〉という意味特徴を持つのではないかと思われる。そう考えることで、従来言われているように「へ着く」「へ至る」など〈到着〉を意味する用例が古代において殆んど用いられないことの説明も付くだろう。

次の 4.2 で見る 2 つの現象についても、〈方向〉という意味特徴を押さえるだけでは説明が難しく、「へ」が持つと思われる〈移動途中〉という意味を考慮する必要がありそうである。

## 4.2 アスペクトの意味

表 2 からもう 1 つ、「へ」に関する特徴を挙げるとすれば、「…へ…たり／り」「…へ…て」という用例が少ないことであろう。これはどう理解すべきか。

鈴木（2009: 312）では、移動動詞に付く「たり」「り」は「移動してきた主体がそこに存在すること」を話し手が目撃している場合に使用されるとされる。確かに、「…に…たり／り」の用例は目的地に到着した後の様子を描くものと解して問題無い。

(6) 正月ににふだうの宮にまうでたりしに、むかしの人などあまたあり  
てさけなどのみて、むかしこひしくおぼえしほどに、（業平集・51）

(7) あひしりたる人のもとにいきたるに、家はむかしのままにて、ある



じのなくなりにければ、はしらにかきつく。(道濟集・53)

これに対して「…へ…たり／り」の用例が殆ど現れないのは、「へ」が4.1で見た〈移動途中〉という意味特徴を持つためではないだろうか。「Xへ行く」等の表す動きが発源地とXの間で進行中なのだとする、その移動に関して〈結果〉という局面は想定しにくい。

「…へ…て」というテ節の用例がやや少ないことについても、やはり「へ」が〈移動途中〉という意味を表すと考えることで、次のように説明を付けることができる。

まず「…に…て」の用例は219例とかなりの量が得られる。この形は、テ節の表す移動動作の後に後続節の行動を起こすという時間的前後関係を表すことができる。

(8) ある女のもとにいきて、ものなどいふに、つきなきけしきなりければ、かへりはべりけるに、…(能宣集・293)

一方、「…へ…て」はこうした前後関係を表すのに向かないようである。16例と少ないながら現れた用例のいずれにおいても、後続節の行動がテ節の表す移動動作の完遂後に引き起こされていることが確実なものは見出せなかった。例えば次の(9)では、「あづまのかた」への移動の途中で後続節の行動が引き起こされている。

(9) 身のうれへ侍りて、あづまのかたへまかりて、ともだちのもとへいひおくり侍(業平集・111)

以上の検討を踏まえ、ここからは「へ」が〈移動途中〉という意味特徴を持つという前提に立ち、話を進めることにしたい。

## 5. 移動先と経由地

本節では、「へ」の表す移動先と、移動の途中で立ち寄る経由地の地理的關係を観察し、「Xへ+[移動動詞]」の表す移動動作の発生位置について考える。

### 5.1 「遠き X へ」の用例から

従来の研究において古代語の「へ」は〈遠い場所〉を表すと解されているが、実例の分析によって証明されたものではない。とはいえ、この従来説の妥当性は以下のような用例の状況からある程度支持することができる。

- (10) その人とほきところへいくなりけり、あきのはつる日きたるあかつき、むしのこゑあはれなり（紫式部集・2）
- (11) 遠き所へいにし人のもとより、このみちにはしでの山と云ふ所なむありける、と云ひおこせたりければ（和泉式部統集・462）
- (12) もてならしたるあふぎを、とほきくにへくだる人に、とらすとて（惠慶法師集・157）

これらのような「遠き X へ」という形は 17 例見出されたが、「近き X へ」という形の用例は 1 例も見出せない。もちろん「遠き」という修飾語が無い用例が大半を占めるので、「へ」の示す移動先は必ずしも出発地から遠い位置にあるとは言い切れないのだが、「近き X へ」という形が作られないことからすれば、「へ」の表す移動先は出発地から見て少なくとも“近くはない場所”であるということになろう。これをもって「へ」に〈遠い場所〉という意味特徴を認めて良いのであれば、従来の研究で推定されてきたことは正しかったことになるが、厳密には“近くはない場所を示す”という特徴を認めるにとどめるべきである。

### 5.2 出発地・経由地・移動先の位置関係

以上の分析が適切であるとする、**「X へ+[移動動詞]」**は“出発地から近くはない X までのどこかを移動途中であること”を表すと考えられることになる。では、出発地と移動先の間のどのあたりを移動途中なのだろうか。

ここで注目したいのは、4.1 で見た**「X へ+[移動動詞]+に/みちに(て)」**などの形の用例である。この形はときおり具体的な地名を伴って次のように用いられる。

- (13) くまのへまゐるに、ゐせきの山こゆとて（道命阿闍梨集・290）

見ての通り、移動先と、そこへの移動途中の段階で起きた出来事の発生地とが、2つの固有名詞によって示されている。この構文の二節は後続節の事柄の発生時・発生場所を表すものであろうから、あともう1点、出発地点さえ分かれば、「へ」が表すと思われる〈移動途中〉の具体的な移動位置が出発地と移動先の間のどのあたりかという情報を導き出すことができるはずである。このような観察を行うのに好都合な用例は歌集の詞書に多く見られる。その中に具体的な出発地がヨリ格などで示される例は無いが、都（平安京）が出発地であると考えておけば大きな問題は無かろう。

表4で、(13)のように地名を表す固有名詞を伴った「Xへ+[移動動詞]…に/とき(に)/みちに(て)」の用例を見出された限り並べ、出発地である都（平安京）、後続節で示される経由地の地名、「へ」格で示される移動先の地名の地理的な位置関係を大まかに示した。最右列では、出発地(=都)をA点、後続節で述べられる経由地をB点、「へ」格で示される移動先をC点としたときに、近接すると見なしうる2つの点を示してある。

表4 「へ」に関わる出発地・経由地・移動先の関係

用例番号	上段：用例	出典	近接する地点
	下段：出発地(都・A点)、経由地(後続節・B点)、移動先(「へ」格・C点) 「……………」は離隔、「一」は近接、「=」は一致を表す。		
1	僧正遍照がもとに、奈良へまかりける時に、男山にて女郎花を見てよめる	古今和歌集・227	なし
	都……………男山(京都府八幡市)……………奈良		
2	源実が筑紫へ湯浴みむとてまかりける時、山崎にて別れ惜しみける所にてよめる	古今和歌集・387	なし
	都……………山崎(京都府乙訓郡大山崎町)……………筑紫		
3	越国へまかりける時、白山を見てよめる 都……………白山(石川・岐阜の境)一越国	古今和歌集・414	B点とC点
4	但馬国の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりの乾飯食べけるに、…	古今和歌集・416	B点とC点
	都……………ふたみの浦(但馬国の景勝地)一但馬国の湯(城崎温泉)		
5	難波へまかりける時、田蓑の烏にて雨にあひてよめる	古今和歌集・918	B点とC点
	都……………田蓑の烏(大阪市西淀川区佃)一難波		
6	あづまなる人のもとへまかりけるみちに、さがみのあしがらの関にて、女の京にまかりのぼりけるにあひて	後撰和歌集・1361	B点とC点
	都……………相模の足柄関(神奈川県・静岡の境付近)一あづま(東国)		

7	はつせへまうで侍けるみちに、佐保山のもとにまかりやどりて、あしたに霧のたわたりで侍ければ	拾遺和歌集・193	B点とC点
	都……………佐保山(奈良市法蓮町)一はつせ(長谷寺, 奈良県桜井市)		
8	源公貞が大隅へまかりくだりけるに、せきどの院にて月のあかりけるに、わかれおしみ侍て	拾遺和歌集・347	A点とB点
	都一せきどの院(関戸の院, 京都府大山崎町)……………大隅		
9	帥伊周つくしへまかりけるに、かはじりはなれ侍けるによみける	拾遺和歌集・350	なし
	都……………かはじり(河尻, 摂津国神崎川河口の港)はなれ侍ける……………つくし(筑紫)		
10	はつせへまでけるみちに、さほ山のわたりにやどりて侍けるに、千鳥のなくをききて	拾遺和歌集・484	B点とC点
	都……………さほ山(佐保山, 奈良市法蓮町)一はつせ(長谷寺, 奈良県桜井市)		
11	つくしへまかりける時に、かまど山のもとにやどりて侍けるに、みちつらに侍ける木にふるくかきつけて侍ける	拾遺和歌集・1180	B点とC点
	都……………かまど山(竈門山, 福岡県)一つくし(筑紫)		
12	くまのへまわり侍けるみちにて吹上のはまをみて	後拾遺和歌集・504	B点とC点
	都……………吹上のはま(和歌山県)一熊野		
13	あふみへまかりけるに、かがみ山にてあめにあひてよみ侍ける	後拾遺和歌集・510	B点とC点
	都……………かがみ山(鏡山, 滋賀県)=あふみ(近江)		
14	東のかたへまかりけるにうるまといふ所にて	後拾遺和歌集・515	B点とC点
	都……………うるま(「鵜沼」の誤記, 岐阜南端)一東のかた		
15	つくしへくだりけるみちにて、すまのうらにてよみ侍ける	後拾遺和歌集・520	なし
	都……………すまのうら(須磨の浦, 明石海峡)……………筑紫		
16	花山院の御ともに熊野へまわり侍けるみちに、住吉にてよみ侍ける	後拾遺和歌集・1064	A点とB点
	都一住吉(大阪府住吉区)……………熊野(三重県南部)		
17	熊野へまうで侍けるに、住吉にて経くやうすとよみ侍ける	後拾遺和歌集・1068	A点とB点
	都一住吉(大阪府住吉区)……………熊野(三重県南部)		
18	神な月ばかりに、ひだへいきけるにこしのを山をみるに、紅葉のなかりければ、かれこれしてよめる	安法法師集・27	B点とC点
	都……………こしのを山(越の御山, 岐阜・富山・石川・福井に跨る両白山地)一ひだ(飛騨)		
19	むまのすけにてはりまへくだるに、あしかのうらにて、よるくらきに、ちどりなきておきのかたにいでぬ	重之集・54	B点とC点
	都……………あしかの浦(「明石の浦」の誤記か)一はりま(播磨)		
20	あづまへくだるに、みののくにときのこほりにて	重之集・217	B点とC点
	都……………ときのこほり(土岐郡, 岐阜県南部)一あづま(東国)		
21	まきといふ人を、心にもあらでわかれたりしころ、つづくにへくだりしに、つりふねどものあそびしを、いづこぞとひしかば、まきのさとといひしかば	為頼集・76	A点とB点
	都一まきのさと(横島, 宇治市)……………つづくに(摂津国)		
22	くまのへまゐるに、みせきの山こゆとて	道命阿闍梨集・290	B点とC点
	都……………みせきの山(井関山, 和歌山県南部)一くまの(熊野, 三重県南部)		

23	あづまのかたへまかりしに、しなののくにあさまのたけにけぶりのたちしを	業平集・102	B点とC点
	都……………浅間山（長野・群馬の境）—あづま（東国）のかた		
24	なすべきことありてまたみちのくにへくだるに、はるかにかひのしらねのみゆるを見て	能因法師集・104	B点とC点
	都……………はるかにかひのしらね（甲斐の白根、山梨県南巨摩郡）のみゆる—みちのくに（陸奥）		
25	いよへくだるに都のかたのはるかになりぬるを	嘉言集・56	B点とC点
	都……………都のかたのはるかになりぬる—いよ（伊予）		
26	六月ばかりにみのへまかるに、あづさの山こゆるに、くものおりゐたるところをみて	能宣集・215	B点とC点
	都……………あづさの山（梓山、滋賀・岐阜の境）—みの（美濃）		
27	つくしへまかりくだりはべるに、すまのうらといふところにて	能宣集・182	なし
	都……………すまのうら（須磨の浦、明石海峡）……………つくし（筑紫）		
28	び中へまかりけるに、はりにまよどりて	麗花集・3	なし
	都……………はりま（播磨）……………び中（備中）		

用例の大部分において、経由地（B点）と「へ」格の移動先（C点）との間が近接することが分かる。出発地（A点）と経由地（B点）とが近接すると言えそうな用例もあるが（表の用例番号で8, 16, 17, 21）、いずれも「に」の異文があるか、または現在位置の分からない地名が使われている<sup>(4)</sup>。経由地（B点）と、移動先（C点）とがそれほど近接していない例（1, 2, 9, 15, 27, 28）でも、経由地（B点）は出発地（A点）から隔たった地帯にある。つまり「Xへ+[移動動詞]」は、出発地から離れ、多くの場合はXの周辺地域を移動途中となっている状況を描くときに使われているのである。「へ」が表す場所は基本的に〈(出発地から遠くない) 移動先の周辺〉であり、それが〈出発地から離れた場所〉という意味にも転用されたと考えることができる。

ここで思い出されるのは、格助詞「へ」が名詞の造語成分となる「辺」から派生したとする通説である。名詞の造語成分から格助詞が生じるという統語上

(4) 用例番号8は片桐洋一『拾遺和歌集の研究』（大学堂書店・1970年）によると「源公貞が大隅守にてくだり侍りける時に」という本文（非定家本第一系統の諸本）がある（p.275）。用例番号16, 17の「へ」は新日本古典文学大系の本文（宮内庁書陵部蔵本）では「に」となっている。用例番号21の「まきのさと」は不詳。筑紫平安文学会『為頼集全釈』（風間書房・1994年）で「槇島か。宇治市、宇治川と巨椋池との間にあった洲」（p.226）とされるのに従えば、例外的な用例ということにはなる。

の変化は他に確実な例を見出しがたく、慎重に扱うべき語源説の一つと筆者には思われる。しかし、そうした変化が起きた珍しい実例として把握できる可能性は、以上の分析によって強まったのかもしれない。すなわち、中古語における「**X**へ」が概ね**X**の周辺を表すと解されるのは、名詞「辺」が上代以来持っている「…のあたり、周辺」のような意味合いが中古語の格助詞「へ」においてもある程度維持されているため、と説明できそうである。

## 6. ま と め

以上、本稿では中古語の格助詞「へ」をめぐって、その意味的な特徴を探った。従来の研究で既に明らかになっていた事柄の再確認も含まれるが、そこから一段深化した分析結果を示せたかと思う。その要点を以下にまとめておく。

- ①「へ」は「…途中で」の意味で解される「…に」「…みちに」という文節の中に現れやすいことから、〈移動途中〉という意味特徴を持っていると推測できる。(4.1)
- ②「へ+[移動動詞]」は助動詞「たり」「り」や接続助詞「て」が後接しにくく、移動先到着後にそこに滞在している様子を描写するのに向かないが、これは「へ」が〈移動途中〉という意味合いを持つためだろう。(4.2)
- ③「遠き**X**へ」という用例は一定数見つかるのに対し「近き**X**へ」という用例は見出せないので、「へ」は〈近くない場所〉を表すと考えられる。(5.1)
- ④「**X**へ+[移動動詞]+に／とき(に)／みちに(て)」という節が後続節の出来事の発生時間・場所を限定する複文のうち、具体的な地名によって**X**と後続節の出来事の発生位置を特定できる用例の大部分において、「**X**へ+[移動動詞]」は**X**と近接する地帯を移動する様子を描写している。このことから「へ」は基本的に〈移動先の周辺〉という意味特徴を持つと考えられる。(5.2)

これらを総合すれば、中古語の「へ」は基本的に〈“出発地に近くはない移動先”の周辺を移動途中である〉という意味特徴を持つことになる。

本稿で論じたかった内容はここまでであるが、以上の分析結果に従えば、中古語の作品・資料における「へ」の出現箇所について新しい解釈を施せる可能性も出てくる。例えば次の「まつこ」の所在地は不明であるが、「土佐へ」とあることからすれば、土佐の近辺にそういった名の地があったのかもしれない。

- (14) にふだうの兵部卿のみこ、土佐へまかりくんだりし、女三宮、まつこ  
といふ所に物語などして侍りて、… (元輔集・156)

次の例では、兼盛が駿河下向の際、都からほど近い粟津に居た恵慶法師に挨拶もせず通り過ぎた後、その言い訳として送った和歌の詞書に「へ」が現れているのだが、これも、駿河付近まで来てから和歌を送ったものと解することになる（目的地の駿河付近まで来てからふと思ひ出し、慌てて書いた和歌だったのかもしれない）。

- (15) 駿河へくだるに、あはづ [= 現大津市南部] といふ所にゑぎやう  
 [= 恵慶法師] がきたるにあはねばかく うらめしき里の名なれや君  
にわがあはづのはらのあはでかへれば (兼盛集・12)

#### 調査資料

○古今和歌集……新編日本古典文学全集／後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集  
……古典選集

○私家集・私撰集・歌合類……『新編国歌大観』

※用例の検索に際しては、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（バージョン  
2024.03）と（株）古典ライブラリー『日本文学 Web 図書館』を使用した。

#### 参考文献

青木侂子（1956）「「へ」と「に」の消長」『国語学』24 pp.107-120

石垣謙二（1943）「助詞「へ」の通時的考察」『文学』11-10〔石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店、所収〕

白倉尉恵（1975）「源氏物語における助詞「へ」について」『東大寺学園中学校高等学校

校研究紀要』1 pp.13-20

五島和代（1982）「源氏物語「へ」の異文と国語史」『香椎潟』27 pp.138-152（福岡女子大学国文学会）

此島正年（1966）『国語助詞の研究－助詞史の素描－』桜楓社

杉井鈴子（1954）「助詞「へ」の成立」『国語学』19 pp.42-54

鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房

園田博文（2006）「『浮世床』における「へ」と「に」の使い分け－共用動詞の分析から－」近代語学会『近代語研究 13』武蔵野書院 pp.225-240

辻田昌三（1999）「八代集詞書に於ける「に」と「へ」」『文林』33 pp.1-14（神戸松蔭女子学院大学）

中川浩文（1959）「助詞「へ」の性格の再検討－その成立の問題にふれて－」『女子大国文』15 pp.93-100（京都女子大学）

森雄一（1995）「助詞「へ」の歴史についての認知論的考察」築島裕博士古稀記念会『国語学論集 築島裕博士古稀記念』汲古書院 pp.291-310

【付記】本稿は、令和6年度JSPS科研費（課題番号22K00578）による成果の一部である。

——文学部准教授——